

2019年10月  
1158号

# 百葉

Manyoh

一冊の会 編集部

〒160-0015 東京都新宿区大京町5

(一冊の会研究室)

## 平和の<sup>ぎょうしょう</sup>暁鐘を打ち鳴らそう

～活動55年目のスタート。10月櫻華塾～

本日、10月27日は一冊の会設立の日です。1967年「一冊の会」は設立しましたが、それ以前から浴風会へのオムツの寄贈活動、子どもへ本の読み聞かせを行っておりました。1964年10月27日、大槻会長30歳の時に3歳の息子さんと近所の子どもに読み聞かせを始めました。

2019年10月27日、秋晴れの気持ちのよい空の下、尾崎行雄記念財団応接室に集まった櫻華塾生一同。今日は55年目のスタートとなるお祝いの日であること、その日を相馬雪香先生が働かれたこの応接室で迎えることの喜びと感謝を、司会の小山副会長が述べられました。そして、一冊の会広報大使佐藤玉美さんの号令で「喜びの歌」を歌い、10月度櫻華塾を開会しました。

### FAWA(アジア太平洋女性連盟)日本開催に向けて

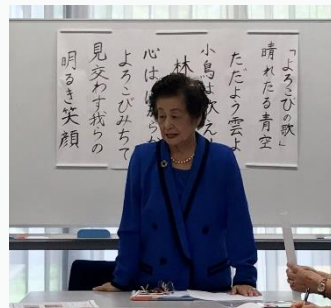
三坂FAWA事務局長が、2021年に開催するFAWA日本総会に向けて行っている準備について簡単に報告しました。日本で総会ができることは、大変素晴らしいことです。2020年の夏の東京オリンピック・パラリンピックも大変素晴らしいことですが、その次はFAWAだと気を引き締め、必ずや成功させましようと呼びかけました。

### 高山市平和の日

9月21日は国連の国際平和デーです。岐阜県高山市ではこの日を「高山市平和の日」と定めています。高山市平和の日記念事業である「飛騨高山国際平和の日の集い」で大槻会長が講演されました。同行した米山さんが感想を報告しました。会長は原稿を徹夜で作成されたものの、当日の会場の雰囲気を見て内容を急遽変更。観衆の心をわしづかみにした場面を目の当たりにして、会長のカリスマ性を改めて感じたとのこと。

大槻会長が、この時のことを補足されました。自分が55年間やってきている事なのだから、原稿はいらない。たとえマイクが無くても3000人に声を通る位でなければ本当のリーダーではありません。相手の心にしんしんと入っていくことが大切、と。パネラーは平塚市長の落合克宏氏、世界銀行東京事務所上級広報担当の大森功一氏、大槻会長でした。大森氏には、今年3月の「講演と音楽の夕べ」で講演していただきましたが、今回は並んで講演いたしました。「55年間走り続けて来たから、こんな力のない私でも、国連の活動に直結するような社会貢献ができました」と会長は謙虚に語られましたが、1つの事を続けていく事は簡単にできることではありません。

国連では、国際平和デーに、日本から寄贈された平和の鐘を鳴らす習慣があります。高山市は市内外の寺院や自治体などへ同日正午に鐘を一斉に打ち鳴らすことを呼びかけています。小雨の中、平和な社会の実現に向けて世界へ響けとの思いで、会長も平和の鐘をついてきたとのこと。一冊の会は国連の歩みと共に活動してまいりました。それが他の多くの団体にはない、誇るべき特徴であり大きな違いです。一人ひとりが平和への思いを込め、新しい時代を告げるための暁鐘(ぎょうしょう)を打ち鳴らし、世界中に響かせましよう。



## 大槻会長のお話

東日本大震災以降、128回東北へ支援に行きました。復興へ向かう最中、この度の水害でやっと出来た家がまた被害にあってしまわれた方もいます。被災地の方から「会長の車が浮いてしまうので、来なくていい」と気遣っていただきました。一冊の会は、これからも被災地支援を続けてまいります。

10月1日は東京都民の日。名誉都民顕彰式が行われ、赤松良子一冊の会最高顧問が名誉都民の称号を授与されました。かつての日本は、名誉のある称号を授与されるのは男性ばかりでした。1981年(昭和57年)赤松先生が労働省婦人少年局長となられた頃に、表彰の候補者に男性しか名前が無かったため、どうして女性はいないのかと質問をされたそうです。すると、男性の有識者に「自分がもらいたいから、そういう事を言うのか」と言われました。それから20年以上経った2003年に赤松先生は旭日大綬章をいただき、今では女性が候補者にあがる事に異論を唱える人はいなくなりました。そして、この度の名誉都民顕彰のニュースに「やったー！」と叫びました。聞いてパッと喜べるか、聞き流してしまうかで、差別撤廃を本気で戦っている人とそうでない人の差がでるところです。

さて、9月30日、第20回日本中近東アフリカ婦人会チャリティバザーが開かれました。我々は会場に行き、タンザニアの絵本『なかよしの水』の啓蒙活動をいたしました。この本はSDGsについて子どもにも分かるように易しく書かれています。一冊の会では55周年を記念して、この本を親子一体の輪読本として、世界に友好の絆を広げる活動を展開いたします。SDGsに求められているのは「誰一人残さない」ためのビジョンです。平和も人間の心の中にあります。共に手をつなぎ、意識変革へ踏み出す一歩が幸福への軌跡となることでしょう。



この本を赤松先生に差し上げたところ、「とても良い本だ、面白いよ。私はこの本を推薦する」と電話をいただいたとのこと。小山副会長が、赤松先生が電話をくださるということは大変珍しいことで、会長が吟味をしてこの本を推薦したのも読めば領けます、皆さん！一緒に頑張りましょう、と呼びかけました。

## 石田理事長から

高山市での国際平和デーの参加、お疲れ様でした。平和とは何か、これは真剣に考えなければなりません。単に戦争がない、それだけでは平和ではありません。途上国では3歳に満たない子どもが次々と亡くなっている、このような状況は平和とはいえません。相馬雪香は「あなたにできる平和から始めなさい」と言いました。自分にできる平和とは何か。一冊の本から広がる平和もある。一冊の鉛筆から始まる平和もある。お金がある人は寄付をする、無い人は知恵を出す。一人ひとりが出来る平和を考えること、そこに原点があります。誰かに認めてもらい誉めてもらい、高い評価を得ることを目的にしているではありません。本当に困っている人、隣で困っている人に心から寄り添い出来ることをやっていくこと。それは地道な作業です。それを55年続けてきたのが大槻会長です。その延長にFAWAがあり、被災地支援があり、途上国支援がある。まずは身近な事から始めましょう。



今回、赤田研究員は6ヶ月の娘さんを連れて参加しました。

途中で授乳する必要もあり、全てを聞くことはできませんでしたが、55年目スタートの記念すべき日をご一緒することができ嬉しく思います。万葉を担当している身として、一冊の会の活動をしっかり記録し、語り継ぐことができるよう、精進してまいります。(赤田)

文責：平間研究員、赤田研究員